

鄂上清子金鑑

第Ⅱ期

第三卷

日記 3

鄂上學

江苏工业学院图书馆
藏書章

第Ⅱ期

第三卷

岩波書店

野上彌生子全集

第Ⅱ期 第三卷

第三回配本

(全二十五卷)

一九八七年一月八日 発行

定価三八〇〇円

著者 野^の上^{がみ}彌^や生^え子^こ

発行者 緑川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二五五

発行所 株式会社 岩波書店

電話 〇三・二五五・四二二
振替 東京六三六四〇

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

日
記
三

目次

[illegible]

昭和五年一月一日 水 快晴

父さんは学校の名刺交換会に出席、それより例により早稲田の夏目家にまわり夜は九時頃別府へ向けてお立ちになつた松室先生を東京駅にお見送りして帰宅、先生は今年七十九になられた。今度の旅行もたんなる保養ではなく、学校の金あつめの目的もあるのさうな。先生の年になつても自分の仕事にあれほど熱心に打ちはり得る態度には学ぶべき多くのことがある。

私は暮れの忙しい家事の疲れもあつて、ぼんやり無為に暮らす

一月二日 木 全

耀三が発熱。風邪で胃をわるくしたらしく、薬をもどしてしまふので少し心配する。下の部屋に今夜から泊まる。

一月三日 金 全

下島氏が丁度昨夜から故郷に帰られたので学校の校医の小林さんに来診を乞ふ。少し気管支を犯されてゐると云ふのでホスピンで湿布をする。

夜六時すぎモキが池の平の寄宿から雪やけの元気な顔で帰宅。鴨の鍋をとりまいてスキー話つきず。十時すぎの汽車で今度は素一が野沢に向け出発。

一月四日 土

文芸春秋社に原稿を送る。

毎日耀三の看護で暮らす。そのひまに年賀状を書いたりするだけ。

一月五日 日 快晴

おひる前洗足の人と（静ちゃんはルスキ）入らつしやる。おすしと茶碗むしを取り、それにしるこを出す。

お貞さんの娘さんのまさ子さんと云ふのはじめて来る。彼女の母によく似たきれいな善良さうな娘である。買つておいた反ものをか^かげる。浩ちゃんには鉛筆と菓子

午後は学校の谷本田代岩田さんに中川一政がいつしよに来訪。うなぎで夕御飯、シヤンパンを抜く。九時すぎまで快談がつづく。彼等みんな三十を出たばかりの青年たちだ。女でこの年頃のものが寄つてこれだけおもしろい機智縦横の会合が出来るであらうか。

谷本さんはどこか三重吉に似たところが顔にも言葉の調子にもある。彼が京都に生れたためであらう。

田代さんはおもつたよりきれいな且つ快活な青年であつた。もう少し深いところが出るやうになると一さうよくなるだらう。

岩田さんは見たところ相変らずの万年ボーイである。しかし彼の善良と上品さはいつも気もちがよい。

中川さんは彼等に比べるとすべてに於て一段の兄である。彼の素朴らしいそれで人並み以上に鋭いちゑは珍しい。

彼等のやうな青年たちを客に持つことはしかし何と云ふ悦ばしさであらう。

一月六日 月 快晴

渋沢さんお昼頃から来訪。亨三さんの入学試験につき。彼は自分の現在の労力で、不自然な試験ベ
んきょうをしないですむ学校に入ることを望んでゐる。一高に別〔に〕入る希望はない。松本浦和を
目ざしてゐるらしい。これは家族の人々や周囲に取つては意外な志望なのである。学校でも一高入
学を不可能とは判定してゐないのである。にも拘はらず彼は今のまゝでは中々一高は骨であること
を信じてゐるらしい。特別の勉強をやれば勿論入れるだらうが、しかしそのため自分の現在ののし
い仕事——（附属の蹴球のマネジャである）を犠牲にしてまでそれをする価値は認めない——その考
へ方の不可は別として、彼が自分の学力を冷静に批判し、普通の中学生の幻影となつてゐる一高
を一蹴してゐるところは偉い見識である。

今まで順当に熱の下つてゐた耀三が夜また三十八度になる。下島先生に来診を乞ふ。大したこと
はないらしいが、とにかくこの病気で冬休み中の勉強がすべて手違ひになつた。これでは今年の入
学試験はダメであらう。来年には斯んなことであつてはならない。

一月七日 火 快晴

今度から素一とモキがドイツ語を教はることになつてゐる藤田さんが来てくれる。モキだけ教はる。
青木さんの小文典。いつしよに聞きたいとおもひ、やりかけてゐるところへ平さんの奥さんが子供
二人を連れて入らつしやる。暮れに買つておいた菓子を子供たちに分ける。おひるはおぎうに。

友岡さんの奥さんや、嘉治さんの奥さんの話をきく。それからまた赤松さんのうちの噂話をも。女はいろんな内輪話をきく、出すのに特別な耳を持つてゐる。

夜素一野沢から帰る。選手たちは北海道に行つてをり、先生は田部さんが女弟子を連れて行つてゐるだけであつた。伊藤さんと云ふのが停車場まで迎へに来てくれた由、わりに孤独であつたらしいが、しかし行かないよりよかつたことは勿論であつた。雪に少しやけ元気なかほをして帰つた。帰りに山想会の連中といつしよになり、その時だけは可なりゆかいであつたらしい。若いもの同士の引く力は偉大である。スキー鉛筆をやどでお土産で貰つて来る。朝燿三にあげたらよろこんだ。

一月八日 水 晴

燿三の熱朝七度五分。これが六度台に下ることを念じてゐる。

素一の持つて帰つたよれものなどの後始末にぎたぐ。みつと雪ちゃんだから命じないことはなんにも渉らないのだからとき／＼かんしやくが起きる。でも自分はずいぶん忍耐力が出来た。

素一と父さんは丸善に午後から出掛ける。藤田さんにやつて頂くためレクラムで『ゲーテとの対話』を素一は買ふ。行き違ひに田中さん来訪。例の通り息子たちの話を熱情をもつて語りつづけた。それから渋沢さんたちとしてゐる刺繍に就いても。あの人が刺繍に熱心になるのは最も似合はしいことで、もし彼女がそれをつづけて行けば、将来のよい職業になるであらうとおもふ。

素一夜帰寮

一月九日 木 晴

耀三の朝の熱変化なし、大したことゝはおもはないが又二三年前のやうに長引かれると困るとおもひ新たにユーカリの吸入をはじめ。これは昨日田中さんにきいたため。そのためといふより、もうその時期になつてゐたのもあらう。その夜はいつもより熟眠が出来、せきも軽くてすむ。

下店静市氏来訪溪仙の画集を出すにつき、一二枚づゝ下に文章をかくことをたのまれたと云つて下の部屋に持つて来る。小さいものであるがおもしろい線だ。兼好法師と春風をえらぶ。

一月十日 金 晴

耀三の朝の熱六度七分になる。これで一と安心する。

父さんは今日より学校、渡辺治右衛門氏がこの間亡くなられて、今日浅草の寺で葬儀、それに列席のためモーニングで出かける。

治右衛門氏は表面はその浅草の寺にちつ居して亡くなつたやうに報じられてゐるが、本とうは小田原の宿屋でたつた一人で亡くなられた由——これは二三日前ひぐらし会から追悼辞を渡辺長男氏と刑部(空白)氏とがたのみに見えた時の話——すべて横浜の渡辺福三郎が世話をして、ほんの小使と云

つて毎月五百円づゝ送金してゐた由、渡辺一家の没落は彼だけが一身にしよつた有様で、勝三郎などは百万円、六郎などは二百万円からまだ持つてゐるさうな。彼等にいちめ抜かれた預金者こそ可哀さうなものである。

耀三に西部戦線異状なしをよんであげる。

夜昨夜の如く安眠。これならきつと引きつゞきよくなるであらうとおもはれる。

一月十一日 土 晴、

耀三の朝の熱六度四分。いよく順調に快くなるらしい。

今日は金開禁。新聞紙上で大分さわぎ立てゝゐるが、経済界にも大した影響なしにすむらしい様子である。これはなんと云つても浜口内閣の特筆すべき手柄であらう。

夜新聞に友岡さんの奥さんが縊死したことが出てゐる。びつくらする。この間平さんの奥さんから彼女がひどいヒステリになつてゐる話をきいてゐなかつたら、なほ一さう驚いたであらう。××さんの妹。原因は友岡さんの母さんとの不調和らしい。この母さんと云ふ人は早く父を失つた友岡さんのために献身的な母らしい愛と努力をつくして来た人の由、そのため友岡さんの母おもひも普通以上であつたらしい。しかし奥さんとは愛を基礎とした結婚であつたのに、きのどくなことが生じたものである。あの生一本な人だけにこたえ方もひどからうとおもふ。

〔欄外〕内田さんの子供の唐助ちゃんも順天院に入院したので、父さんが今日見舞に行き、万年筆とカステラをあげる。そのときモキにも久しくなかつた万年筆を買つて来て下さる。

モキと明日のドイツ語の下しらべをする。こつけない覚え違ひをしたりして大笑ひする。素一も帰つてゐるので、単語などは彼がそばから教へてくれる。斯うした愉快なやり方でドイツ語をものになしうればこの上もない。二十年前にかぢつたのが残つてゐるのはおもしろい。そのため幾ら覚え易いかわらない。

一月十二日 日 雪

多くは積まないうちやむ。去年からの雪らしい雪である。燿三の熱も順調に下降をつづけてゐる。下島氏来診、もう二三日しつぷをすることになる。

藤田さん来り、はじめてのレッスンがある。素一が文法の上からさんく突つ込まれる。今まで可なり呑気な読み方をしてゐたらしい。そのため藤田さんがゑんりよなく突つ込んでくれるのは有りがたい。彼はしよげて、自信をくだかれ、不平らしい。しかしこの調子で一年間責めつけられたらずつと効果があるだらう。

モキが見事に覚える。彼が今から藤田さんについて正しい勉強をして行つたら屹度多大の効果を納めるであらう。

父さんは友岡さんを訪ねる。今日告別式を行ふ由、

夜益田氏の死を電話で報じて来る。この頃はなぜ斯んないやなしらせばかり受け取るのであらう。

一月十三日 月、晴れて、おだやかで、云ひやうもないほど美しい日であつた。

朝病室を毎朝よりも念入りにさうぢする。気もちよい。燿三の熱順調に下降をつづける。

父さんは今日益田さんの家に行つたところ、まだ納棺もせず、その上臨終に医師も看護婦もゐなくて様子が分らなかつたと見え、死人に眼をとぎせてなかつたので、動かない生命のない眼を大きくあけてゐたので気味がわるかつた由、益田さんの父親は牧師で母さんもまだゐらつしやると云ふのに、デンボウ打つても返事も来ぬ始末の由、キリスト教の信仰を益田さんが否定してゐたことが不和の原因さうな。しかし不和は不和としてこの場合にまでそれをつづけられる親はなんと云ふ冷

酷な人であらう。それが牧師だからなほおどろくべきである。臨終はきのどくな有様であつたらしい。家政婦上り妻君に取りすがり、彼女にはまゝ娘のたつたひとり「の」遺子に左様ならと云つて亡くなられたと云ふ。

斯ういふ話をきいたりすると健康の貴重さが新しく考へられる。

一月十四日 火 美しき快晴

耀三ます／＼よし、おくれた手紙の返事などかき、その他は彼の看護で過す

夕刊に新しいスキー遭難者の記事が出てゐる。暮れの二十八日に立山に向け出立した六人の青年が予定の六日になつても下山せず、それでも老練な案内人が二人もつき、メンパーも山岳通ひで、用意も十分であつたので、多分どこかで避難してゐることゝ想像されてゐたのが、避難してゐた小屋ともに二千尺の雪溪の底に吹き飛ばされたらし「い」のである。その小屋のあつたあとに、スキーの片一方と、靴が一つ残つてゐたと云ふ。一人は土屋侍従の息子の慶応文科生、あとはみんな大学出の若い有為な工学士であるが、その中には田部さんの甥と金春の松平さんの息子さんが交つてゐるのでお気の毒である。どんな山岳通でも、またどんな馴れた案内人でも、小屋ごと吹き飛ばされては何んとしようもないわけである。しかしこの頃は知つた人の中にあまりに不幸な話がつゞき過ぎるようだ。用心しないといけない。

一月十五日 水 美しく晴れた。

父さんは今日関西の旅行から帰京の学長を迎へるため九時過ぎ家を出る。

下島医師来診、燿三の脊の呼吸の音が大きうよくなつたと云ふ。今度はおきても十分静養してから学校には出す方よいとおもふ。この間から燿三のために朗読してやつてゐたルマルクの「西部戦線異状なし」を今日でよみ終る。昔から戦争のことを取り扱つた文学の中に於て、これは最もユニークな地位をしめることは疑ひない。その原因は戦争の悲惨とともに、二十の青年らしい牧歌的快活と、率直に充ちてゐるからである。トルストイの取り扱つた戦争には前者の悲惨とともに十分な哲学があつたがルマルクの持つてゐる寄宿舎的な陽気さはない。さうしてまたルマルクの戦争哲学はいかに深刻な思惟的経過でもどことなくギムナジウムの匂ひがする。学校の制服らしい幼稚と可憐がある。そこがまた人のこゝろを引く。いろ／＼な事実談を組み合せて作つたものだけあつて、この中に含有されてゐる多くの話は一つ／＼がおどろくべき短篇である。難を云へばそれをつないだ感想がくり返しになることであらう。

しかしこれは際もの出版として一時に消え去るべきものではない。

一月十六日

一月十七日

一月十八日 土 朝のうち少し曇り、あとよりおだやかに美しき日となる。のつと日の出ると云ふ風なてり方。

燿三を起す。殆んど十六日ぶりに起きたわけである。肺炎などにならずにすんだのは返す／＼も仕合せであつた。午後学友の中川さんが見舞ひに来てくれる。

茂吉郎は大山公の私邸内にある陳列館を見学に行つてくれぐれに帰宅。彼の考古学上の研究品や発掘品を集めてゐるのである。隣に椅子テーブルの並んだ研究室がついてゐて、この間支那で亡くなられた岸上博士に就いて魚の研究中であつたのに亡くなられて困つてゐると云ふやうな話をした由、高校からは六人出掛けたのだが、外に公爵の客が一人あつて、君たちもいつしよに來給へ、説明するからというく説明の勞をとられたらしい。言葉なんかとても乱暴よとモキは云ふ。軍人であつたからであらう。それに手首の折れた青いしやれた上着をきて、ぜいたくをしてゐるのさと、また云ふ。何んとかの研究を発表してゐるから、今にノーベル賞を貰ふ。その時には君たちに大に奢るよ云々

素一は帰宅せず。

父さんは岩田さんに誘はれ、谷本、三代、木村、井本さんと云ふ連中と、岩田さんがこの頃凝つてけいこしてゐる品川の合氣術の先生の家に見学に行かれたと云つて少しおそく帰宅、これは中々えらいものらしい。

浜松の堀野氏より到来のはまぐりとかきにて一同たのしき晚餐。

一月十九日 日 晴、

素一に朝電話して、ドイツ語のけいこにおくれぬやう注意する。藤田のけいこ十時過より十二時すぎまで。モキは中々よく出来る。ぐづぐづしてゐると追つつけなくなりさうだ。

栗原氏の紹介した高畑さんと云ふ婦人父さんに能の話をききに來る。

セックスの意識についてあんまり長い間圧迫されて来たために、自分の感情が非常に不自然になつてしまつたことがこのごろつく／＼痛感される。もつと朗らかに明るく考へなければならぬ。これを理性では知り過ぎてをり、ヘンに疑られたり、かんじされたりすることがどんなに苦痛であるかを人一倍知つてゐるくせに、その型で自分がすつかりやりさうになるのに自分でびつくらする。むしろ彼がびつくりしてゐるらしい。それはあまりに彼に似てしまつたからである。これは彼が長い間私に授けた教育である。自分から出たものがすつかり自分に返される——彼は屹度それにびつくらしてゐるであらう。私より以上に。彼はそんな感情から今はすつかり自由であり超越してゐると云ふ。しかし私はすべては信じない。よし本統であつたとしても今になつてはおそ過ぎる。私の若さも、それに依つて保たれたわづかな美もなくなつた今に於て。彼は私の貴重な二十年を空費させた責を負ふべきである。

しかし一方から云へば私の鎖は私の成長に役立つた点に於ては十分の価値を持つてゐる。それは獄中で人が社会にゐる場合よりもいろ／＼な意味で修養を積むと同じである。

夜、古屋さん来訪。Yのことで電話かけて来て貰つたのである。彼にYを貰つてもらはうとすることを学校の稲葉氏と中島氏とを通じてこの間から話してゐたことに就いて直接談合した方よいからとおもつたからである。話は中止となる。彼の理性的なおちついた考は尊重すべきである。

父さんは、この談合をはずす意味で外出、呉さんをたづね、支那の土偶をいくつかのギリシアの瓶の返礼として送り、いっしょに武蔵〔野〕館に行つて、はじめてトーチを見て十時近く帰宅。

呉さんは書生をおいて暮らしてゐるらしい。呉さんらしいキッチンとした非常に神経的な暮らし方らしい。ひどい気むづかしやで、奥さんもち大變であつたらうと父さんは云ふ。さうかもしれない。しかしそれも一性格としておもしろい。家はちんまりした洋館で書齋の次に八畳の畳の間があり、家具も非常に立派ではないが相応で整然として、ガストローヴで暖められ、よい古典とピアノと——彼はさう精力的でもなささうだから、それで独りで暮らされ、ば申分のない生活であらう。これからは知識階級のものでさう云ふ独身生活を送る人がだん／＼ふえて来るであらう。男も女も。

一月二十日 月 晴

(二十三日になつてつける日記でよく覚えなない)

雪子とみつを本郷座にやる(うり切れで新宿松竹館に行く) シュン来訪、夜労働女塾の織本氏来訪

一月二十一日 火 晴

美しい日光のさす二階の廊下で燿三と日向ぼつこをする。彼を外氣にならすためと、私も月の病気で気分がすぐれないので、ぼんやりのどかに暮らすため。日向ぼつこしながらドイツ語の文法をけいこする。

午後燿三の熱がまた三十七度三分まで上る。二年前のやうなことになるのではないかと云ふ恐怖におそはれる。また床に入れる。彼が咳をし(それも今は殆んど終日しない位なのに)たんを吐くと、それがまつ血ちになつたらと云ふやうな危懼でいっぱいになる。下島先生にデンワすると、まだ炎症が残つてゐるので、その位の発熱は自然であると云ふ。来診を乞ふと丁度宴会に行くとところで着換